

ヴィンコ・グロボカール作品における  
美学的・社会的システム批判としての体系化と逸脱  
—— 1970年代前半の「転換点」前後の3作品《レス・アス・エクス・アンス・ピレ》、  
《エシジャンジュ》と《変わらない一日》の比較によるその手法の分析 ——

Systematization and Deviation as means of Criticism of Aesthetic  
and Social System in Vinko Globokar's Composition:  
Analysis of its modes thorough comparasion of three works  
around his "Turning Point" in early 1970s, «Res / As / Ex / Ins  
-pirer» , «Échanges» and «Un jour comme un autre»

坂本 光太 SAKAMOTO Kota

ヴィンコ・グロボカール Vinko Globokar (b. 1934) は、トロンボーン奏者、即興演奏者、作曲家であり、多岐に渡る活動を通して音楽の同時代的なあり方を厳しく追求してきた。その追求の中で、価値観の大きな変動と「前衛の危機」を迎えた 1970 年代前半ころに「転換点」が訪れ、創作の方向が定まったと自身で語っている。では、何をもって「転換」と言えるのか。本人の言説によれば、それは彼の創作が「純粋な音楽」から「政治（社会）参加の音楽」を巡るものになったことにあるとされる。また、これまでのところ最も総合的なグロボカール研究である Beck (2012) では、この時期を境に彼の創作が①音楽を成立させる諸制度に対するアンチテーゼとしての「音楽に関する音楽」、②政治や社会の問題に対するアンチテーゼとしての「音楽外的な主題」をもつ音楽に分かれるようになったことが指摘されている (265)。しかし理念のレベルにおいてはそうだとしても、実際の作品のレベルで何が起きたのだろうか。

前衛と社会的・政治的な問題という 2 つの課題には、その比率はどうあれ多くの作曲家が取り組んできたが、グロボカールはその 2 つをどのように捉え、どのような思想と技法をもって取り組んだのか。そして、それはどのような意義を持っているのか。

本研究は、この「転換点」のグロボカール作品の音楽的变化を捉えることによって、その意義と独自性を明らかにしようとするものである。具体的には、方向性を異にする楽曲、「音楽に関する音楽」である《ラボラトリウム Laboratorium》(1973-1985) より、金管楽器独奏曲の《レス・アス・エクス・アンス・ピレ Res / As / Ex / Ins-pirer》(1973) と《エシジャンジュ Échanges》(1973) を、そして「政治（社会）参加の音楽」であるシアター・ピース、《変わらない一日

Un jour comme un autre》（1975）を、主として演奏方法の体系化の観点から分析する。その上で、体系（体系化）に関する彼の思考と実践が、その「転換点」において中心的役割を果たしたことを示す。

第1章では、「転換点」付近の1970年代ころまでのグロボカールの半生を、移住地と活動内容によって7つに区分し記述した。移民という出自、多地域、多音楽ジャンル、多言語、そしてトロンボーン演奏者、即興演奏者、作曲家、教育者としての活動といった多元性に満ちた環境と立場の中で、コンポーザー・パフォーマーとしての地位を確かにするまでの軌跡を辿った。

第2章では、「否定」と「アンガージュマン（政治参加）」の同時代的なあり方を追求するグロボカールの音楽実践態度に、テオドール・W・アドルノとジャン＝ポール・サルトルの思想が与えた影響を明らかにした。

アドルノは『啓蒙の弁証法』、『新音楽の哲学』、『否定弁証法』で合理的体系への批判と文化産業批判を行なったが、グロボカールは前衛音楽と即興演奏という自らの活動領域の中でその問題意識を応用し、「否定」や「拒否」という概念を用いて、音楽的営為、既存の音楽体系、音楽における欺瞞的な「美しさ」を批判した。その上で、現代音楽における演奏者の今日的な重要性を説き、演奏者に不可能性と思われるような課題を課す（「演奏者の楽器との戦い」を誘発する）ことによって、そこに「人間的エネルギー」が立ち現れ、合理的な仕組みを挑発するとした。

サルトルは1948年の『文学とはなにか』の中で、文学者の政治・社会参加（アンガージュマン）を「はっきりした」意味作用を持つ文学の領域に限って提唱したが、1960年代後半の政治的危機や価値観の変動は、「アンガージュマン」の範囲を、現代音楽を含む芸術全般の範囲にまで拡張した。グロボカールは音楽による「アンガージュマン」に取り組む際、『文学とはなにか』をもじり、「音楽とはなにか」「音楽の機能とは何か」「なぜまだ作曲するのか」と「紛れもない内容」を伝えることができない音楽の抱えるジレンマについて自らに問いかけた。その上で、音がどのような環境からも抽象化されている場合に、音自体に政治性は存在しないが、あらゆる奏法、あらゆる音色が生み出される全体の文脈、演奏される場所や環境、聴く人や演奏する人の社会状況、これらすべてを原因として、すべての音楽は広い意味で政治的な意味を持っていると主張し、「音楽外」の主題に取り組む上で、それに用いるテキスト、楽器法、形式をその主題に合致させながら「何かをコントロールするというよりも、社会を助けることを目的とした作品」を創出することを目指した。

第3章では、55曲からなる長大な曲集《ラボラトリウム》より、コンポーザー・パフォーマーとしての代表作と目される金管楽器独奏曲の《レス・アス・エクス・アンス・ピレ》と《エシジャンジュ》を分析した。2曲にみられる特殊奏法の体系は、演奏者の身体・心理を極限的な状況に追いやることによって演奏を不可能にし、作品の構造的なものを破壊するという「否定」的意義を有し、「合理」的な規範から「非同一性」を解放するための矛盾の契機として作用する。また、楽曲中の各パラメーターに現れる数的な構造の中の意図された逸脱は、演奏の自壊に至る身体・心理のプロセスと共に、体系という合理的規範を否定する契機として提示される。

第4章では、実際の拷問の被害者が記したテキスト（「手紙」）に基づく、ソプラノとアンサンブルのための《変わらない一日》を分析した。本シアター・ピースにおける個別に体系化された特殊な楽器法は、視覚的、演劇的、社会的な「音楽外」の要素と組み合わせられ、楽音をグロテスクに変容させることや、その視覚的効果によって、一定の意味を獲得した。また、6つのパートの奏法等の体系は、「言語的レベル」「身体的レベル」「象徴的レベル」という3つの次元において、互いに結びつけられ、意味のネットワークを形成している。特殊奏法の体系によるこの2つの意味性は、「手紙」の言葉を用いることなしに、痛みや不正義に満ちた「拷問の物語」である「手紙」の内容を意識させる手段として用いられている。同時に、体系化された特殊奏法による強烈なノイズ音響は、「場違いな」ポピュラー音楽との際立った対比において作品の境界線を攪乱し、観客に社会問題の構造を否が応でも自覚させる「アンガージュマン」の意義を有していた。

終章では、《レス・アス・エクス・アンス・ピレ》、《エシジャンジュ》と、《変わらない一日》の間、すなわち「純粋な音楽」（美学的な音楽）から「政治参加の音楽」への「転換」の際に起こった作品の質的な変化を、演奏指示の体系化の観点から考察した。

《ラボラトリウム》中の2楽曲である《レス・アス・エクス・アンス・ピレ》と《エシジャンジュ》では、厳格に構造化された特殊奏法の身体的・心理的負荷は作品に「攻撃性」をもたらすと同時に、「純粋に音楽的な要素」と「弁証法的な矛盾」を生じさせる。その結果として演奏は崩壊し、作品の秩序は崩れ去ってしまう。この極度の緊張状態のなかに、「演奏者と楽器は、正確に音を出すための装置である」という規範が反転する。このシステムの否応なしの崩壊——身体の敗北——に、透明化していた個々の身体の「非同一性」が現出した。

《変わらない一日》においては、《レス・アス・エクス・アンス・ピレ》と《エシヤンジュ》で追求された演奏指示の体系化の理論は、演劇的な身振り、日用品の楽器としての使用、そして拷問被害者の「手紙」のテキストといった「音楽外的」要素と組み合わせられながら、人道的な問題を抱える社会構造を模倣するために用いられていた。

以上のことから、「転換点」におけるグロボカール作品の音楽的变化は、体系化による物象化（合理）の問題意識の範疇が、身体（個人）から社会（集団）へと拡大されている点、またその関係性が、体系化の崩壊による人間性の奪還と、体系化の遂行による人間性の喪失という形で反転されている点にあると言える。

そして、「転換点」前後の作品の分析と比較を通して重要なものとして浮き彫りになったのは、そうした拡大や反転といった変化はありながら、「純粋な音楽」と「政治参加の音楽」に同じ社会的・美学的な問題意識と構造が貫かれていることである。グロボカールは、演奏行為をパラメーターとして扱い、その体系化を徹底的に推し進めることによって、体系そのものに「裂け目」を生じさせた。このように、体系への批判を体系そのものの内側から行うことで逆説的に体系の非人間性を露呈させる手法は、「転換」を経て、社会批判としての表現を一層深めている。それは今日の社会状況においても、いまだ有効な試みではないか。